初めての書道

小五　ザムゼ　勉

僕は、日本人の母、ドイツ人の父を持つ国際児です。ベルリン生まれベルリン育ちの僕にとっては、日本にいる日本人にとって当たり前のことでまだ経験したことのない事ばかりです。たくさんあります。この夏、補習校で支給された全科目の教科書のうち、書写の教科書に興味をもったので、母にたのんで筆で字を書くということを体験させてもらうことにしました。

母に用意してもらった書道用具は、僕が今まで見たことのないような、不思議なふしぎな形の物ばかりでした。単なる鉄のぼうのような文ちん。ヘンな黒いかたまりである墨。最初にトレーシングペーパーかとかんちがいした半紙。黒いフェルトの布の下じき。ヘンな形をした黒い石のかたまりのようなすずり。そして、一番大事な大筆。

一通り用具の説明を受け、それらを正しい

場所に置いた僕は、「さあ書くぞ」と、意気込んでいました。しかし、残念ながら、その前に、墨をすらなければなりませんでした。これがけっこうめんどうな作業で、意外と時間もかかりました。

「これでやっと本当に書き始められるぞ！」と、わくわくして筆に墨をつけた僕は、まるで万年筆で字を書くときのように半紙に筆先を向けました。と、そこで、母の「ストップ」が入りました。書道のしせいは、えんぴつやペン、万年筆で書くときのしせいとは、全くちがうのだというのです。一番大きくちがうところは、右腕全体です。ひじから先を一切机につけず、宙にうかせたまま書かなくてはいけません。しかも筆のじくは真っ直ぐ真上に向けて立てなくてはならないのだとか。さらに、筆を持つときの指の形も直されました。

「書道」って、なんとめんどうくさくて、かたくるしいものなんだろう。こんなしせいや持ち方で、一体きちんと文字が書けるのだろう

か。と、その時僕は思いました。

さて、これから本格的に書く練習を始めることになりました。とはいっても、まずは、「一」だけ。僕は、「ただ横ぼう書くだけなんて、すごいかんたんなことじゃないか」と、思っていたけれど、いざ書いてみると、とんでもなくむずかしいのです。最初の「止め」の筆のほ先は左ななめ上を向いているようにして、しっかりとゆっくりと筆を半紙におしつけます。そして、一旦力を少しぬきながら筆をほんの少し半紙からうかせてゆっくりぬきとります。この、ほ先の向きを正しく保つこと、正しいかかげん、ちょうどいいスピード感、ていねいな「止め」と筆のぬきとり方が、意外にもとってもむずかしくて、お手本のようにはいきませんでした。

何十回か「一」を練習した後で、たてぼう「丨」の練習に入りました。たてぼうは横ぼうよりも力強く太く書いたほうが、格好がよいらしいです。が、僕の場合は、なぜかその

逆で、たてぼうのほうが細くなってしまいました。何回か練習しているうちに、「ほ」先の向きがまちがっているのだと、わかりました。「ほ」先の向きひとつでごんなにちがったいんしょうになってしまうなんて、一画いっかく集中しなくてはならない書道って、大変だなあ」と、思いました。

最後に、僕の名前である「勉」のために、色々な部分の練習をしました。ここで、墨のすり直しもしました。「ノ」の、力のぬき方と筆のほ先のそろえ方の、なんとむずかしいことか。「フ（折れ）」の、筆をまわさずにいったん止めて真っ直ぐ下に下ろすことの、なんとむずかしいことか。それに加えて「し」の、曲げた後のびみょうなまるみを上手に書くのにも、くろうしました。でも、むずかしかったからこそ、思っていた通りの筆運びができたときは、とってもうれしく感じました。

母が気合を入れてドイツ人あてに万年筆であて名を書くときは、僕と同じ万年筆を使っ

ているとは思えないようなスピード感と太い細いのメリハリがあります。これは、もしかしたら、日本人として書道を習っていたことがベースになっているのかも、と今回の書道を体験して僕は考えました。これを機会に、僕も、えん筆や万年筆でも美しい文字を書くように意しきしていきたいな、と思いました。